明治学院大学キリスト教研究所
ニュースレター

あんげろす

キリスト教、とくにカルヴァン派を中心とするプロテスタンティズムが、近代自然科学の成立に大きな役割を果たしたことは広く知られている。「超越神以外の何者をも絶対化しない」という世界観が、われわれの住むこの世界の相対化・対象化を促し、それが観察・実験に基づく自然科学を成立させる基本的要因になった、というのである。

だが、今回の一連のオウム報道に接して以来、私には、このような説明が何か空々しい表層的なものに思えてならない。それは、この教団に多くの自然科学の研究者が関与していたから、というのではない。むしろ、この一連の出来事が、宗教というものが本来持ちながら、ともすると見落としがちなある〈危険な〉側面を改めて垣間見させてくれたからだ。

およそ「宗教」なるもののもつこの側面に目をつぶっては、「キリスト教研究」も名ばかりのものとなろう。

水落　健治

第11号
1995. 9